

小学生と大学の交換留学生との 交流授業における新たな意義

— 2020年の英語(外国語)教科化に向かう中で —

白 土 厚 子
関 麻由美

1. はじめに

多文化共生の必要性の高まりの中、日本人児童・生徒と留学生による参加者相互の異文化理解を促進する教育実践も様々な形で行われてきた(星, 2009; 金城, 2010; 白岩, 2012; 米本, 2016)。さらに、2011年度から外国語活動が小学5、6年生に必修化され(文部科学省, 2008)、国際理解教育と英語教育を結ぶ取り組みも行われるようになってきた(井上ら, 2014; 阿部, 2017)。このような教育環境の中筆者ら(白土・関)は、2011年度の秋から2019年7月までに計16回、白土が英語アドバイザー兼外国語活動補助員として関わる小平市の公立小学校の主に6年生児童と、関が担当する津田塾大学の交換留学生の交流授業を行ってきた。

本稿では、2020年度の教科化に向かう中で、改めてこれまでを振り返り、その中でもとくに、交換留学生から問題提起があった今年度(2019年7月実施)の交流授業に注目する。次に、達成された目的、および、教育環境の変化の中実践から浮かび上がってきた問題について議論し、本交流授業の意義を明らかにする。そのうえで、児童と交換留学生双方にとって今後どのような取り組み方が良いのか具体的改善策を見出していくことを目指す。

2. これまでの経緯

まず、小学校児童と交換留学生との交流授業開始に至った経緯を簡単に説明する。交流授業を開始した2011年は、すでに述べたように小学校で週1回5、6年生の外国語活動(45分授業)が必修化された小学校英語教育の節目の年である。実践校でも白土が指導計画を立て、担任とチームティーチングで年間35時間外国語活動を行い、ALT(外国語指導助手)もその内3分の1の活動に参加した。しかしながら、それ以外の時間は担任や白土と児童、あるいは児童同士の活動が大半となり、お互いの気持ちを伝え合う活動ではあったが、教室という作られた環境であるため、児童の中には、本当に自分たちが学んでいる英語¹が知らない外国の人々に通じるのか、実感できない児童も多かった。とくに6年生になると、教科として英語を捉え、教室内のコミュニケーション活動にあまり積極的に取り組めない児童も出てきた。そこで、交換留学生と交流授業を行えば、教室の活動を外の世界と結びつけることができ、英語をコミュニケーションの道具と捉えて英語活動²に対する動機づけの高まりが期待できるのではないかと考えた。その上、児童が英語以外の様々な外国語やそこで生活している人々の文化・習慣に触れることができると考え、地域のリソースの活用・交換留学生の地域貢献双方の視点から、白土が交換留学生のボランティア参加を呼びかけた。

交換留学生にとっても意味のある交流活動になるならば授業の一環として参加したいと、白土の呼びかけに関が応じたのが始まりである。交換留学生は大学のキャンパス内の寮で生活しているが、人によっては教室内だけの日本語使用に限られている。普段の生活では知りえない小学校という場面で日本語や日本の学校文化に触れるのも良い機会であると考えた。また、過去の交換留学生の中には帰国後にJETプログラム³のALTやCIR(国際交流員)あるいは民間の語学学校の教師として再来日する者もいる。日本の小学校での体験が将来役立つ可能性もあるだろうと考えた。また、小学校が大学から徒歩7分程度の場所にあるため、関の担当する交換留学生対象の漢字クラス1コマと昼休みの時間を使うだけで、他の授業時間には影響がないことも、授業の一環として行うための条件に合っており、幸いした。そこで、児童、交換留学生の双方にとって利益のある活動、つまり互惠性のある活動になるよう教案を練って実施するに至った。この経緯については関・白土(2014)にも記述した。

筆者らは、当初の狙い通り、児童と交換留学生、さらに担任や日本人ボ

ランティア学生⁴へのアンケート等の振り返りから、双方にとって十分意義のある活動であると捉えてきた。しかしながら、今年度（2019年7月）の交流授業に関する留学生のアンケートには、すべての留学生が英語を話すわけではないので、英語の苦手な交換留学生にとって英語での自己紹介が負担になっていること、また、英語による交流を期待されているように感じて戸惑いを感じたことを述べたものがあった。筆者らはこの感想に注目し、なぜ今までとは違うこのような感想が出てきたのかという問題意識を持った。そこで児童と大学の交換留学生とのこれまでの交流授業を振り返るとともに、この9年間の教育環境の変化に言及し、現在児童と交換留学生双方に求められている交流授業の在り方を探ることとした。

3. 教育環境の変化

16回にわたり交流授業を継続してきたこの9年間で、小学校の英語教育と大学の留学生を取り巻く環境は少しずつ変化してきている。まず、小学校英語教育では、2020年度から新学習指導要領（文部科学省、2017）が全面实施となり、教科化となる5、6年生の外国語科では、年間70時間の実践により「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力」（p. 137）を育成するという目標が示された。育成のポイントはまず、自分の考えや気持ちを伝え合うために実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な4技能を身につけること。さらに、外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことである（文部科学省、2017）。ただし、2011年の必修化から変わらず文部科学省が示す学習指導要領では、外国語として「英語を履修させることを原則とする」（2017, p. 145）と明記されている。つまり、外国語科の目標は、英語の実践的運用能力の育成、主体的にコミュニケーションに取り組む態度、そして国際理解教育の充実と捉えることができる。

そのため指導者は、児童が将来自分の夢の実現に向けて豊かな人生を創り上げていくためのコミュニケーションツールとなるように、英語を指導することが期待されている。さらに、外国語の習得には時間がかかることを考えれば、小学校から始める英語学習が中学校・高校へとつながり、社会人となっても自律的に学び続けられる人を育てることが大切である。

その一方、外国語科の教材設定の観点として、新学習指導要領（文部科学省，2017, p. 144）では「多様な考え方に対する理解を深めさせ、公正な判断力を養い豊かな心情を育てることに役立つこと」「広い視野から国際理解を深め、国際社会と向かい合うことが求められている国の一員としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うことに役立つこと」と説明されている。つまり、国際理解の重要性が示されている。これは、「日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと」「異なる文化を持つ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること」と記載されている現行の学習指導要領（文部科学省，2008, p. 12）と比較しても、その重要性が高まったことは明らかである。

このような変化は、社会のグローバル化と無縁ではない。日本における在留外国人の増加やそれにとまなう外国につながる児童の増加によって、児童は多様な文化や価値観を持った人と出会い、多様性の中で生きていく準備をすることが求められている。2018年12月に「出入国管理及び難民認定法及び法務省設置法の一部を改正する法律」が成立し、2019年4月に施行された。今後ますます在留外国人が増え、数年後には300万人を越える可能性も指摘されている。このような社会で生きていくために、小学校でも様々な人々と接する機会を作り、体験的事例を通して相手の状況や立場を共感的に理解できる心情を育てていくことが必要であろう。外国語科の授業では、まさにこのような取り組みが期待されている。

次に大学の留学生を取り巻く環境に目を向けると、こちらでも変化が起きている。学内においては、「留学生の貢献を考える会」が2004年に発足し、年に2回の会議を行ってきた（2016年に終結し、2017年からは国際センター運営委員会の中で「留学生に関する集中審議」の時間を設けて必要に応じて問題点を審議）。関は所属する埼玉県のパールスカウト三芳第1団と津田塾大学の交換留学生との交歓会（2006年より毎年1回実施）の実施報告を2008年から、また、小学校との交流授業の実施報告を2012年から提出するようになった。

留学生の貢献が学内において評価されるにとどまらず、地域貢献という点でもその期待が大きくなってきたことは、次の事実においても明らかであろう。2017年から、津田塾大学のある小平市より大学に「社会関係・協働事業の取り組みに係る実態調査」の依頼がくるようになり、関のかかわっている活動としては、小学校との交流授業を実施していること、また次年度もその予定であることを報告してきた。そして、2019年1月10日、津田塾大学と

小平市との間で包括連携協定が締結された。協定に基づく主な取り組みとして、「東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた連携、英語教育における連携、国際交流の推進、両者が有する知的資源、人的資源及び物的資源の交流、活用」（津田塾大学戦略推進本部事務室（編），2019, p.5）が挙げられている。津田塾大学の交換留学生と小平市の児童との交流授業はこの主な取り組みの4つのうち、3つに相当するものにほかならない。

このように小学校での外国語科の授業で期待される取り組みと社会の留学生への期待とが一致する環境が少しずつ整ってきた中で、これまでの交流授業を振り返り、児童と交換留学生双方にとってより一層価値のある取り組みにするためにどう改善すべきかを探る。

4. 交流授業の概要

4-1. これまでの取り組み

過去16回行った交流授業では、5年生を対象とした取り組みも数回行っているが、本稿では6年生を対象とした15回の交流授業を中心に報告する（表1参照）

表1 交流授業の活動一覧

	実施日	活動A	活動B	活動C	活動D	活動E	活動F	活動G	その他の活動 ㊟：児童 ㊿：留学生	給食
		交換留学生の自己紹介	児童の学校案内	児童の行きたい国の紹介	児童オピニオン紹介	児童の日本と地域のお勧め紹介	児童の将来の夢の発表	交換留学生の出身地紹介		
1回目	2011年 11月1日	○	○					○	㊿校内の漢字書き取り	○
2回目	2012年 7月10日	○		○				○		○
3回目	2012年 10月30日	○	○					○		
4回目	2013年 7月9日	○		○				○		○

5 回目	2013年 10月29日	○	○					○		○
6 回目	2014年 7月15日	○		○				○		○
7 回目	2015年 7月7日	○		○				○	②主導アイスブレー カーゲーム ②⑦七夕飾り	○
8 回目	2015年 10月27日	○	○					○		○
9 回目	2016年 7月12日	○		○				○	②主導アイスブレー カーゲーム	○
10 回目	2016年 12月13日	○			○			○	②主導アイスブレー カーゲーム	○
11 回目	2017年 7月4日	○		○				○	⑦主導多言語ゲーム ②⑦七夕飾り	○
12 回目	2017年 12月19日	○				○		○		○
13 回目	2018年 7月3日	○				○		○	②主導日本の遊び ⑦主導の多言語ゲーム	○
14 回目	2018年 12月4日	○					○	○	②主導のゲーム ⑦主導多言語ゲーム	○
15 回目	2019年 7月9日	○				○		○	⑦から簡単な母語を学 ぶ活動	○

活動 A は、交換留学生在が 1 人ずつ英語と母語と日本語で自己紹介した。活動 B、C、D、E、F、G は交換留学生 1 人に対し、児童 5、6 人と日本人ボランティア学生 1 人またはなしの班編成で行った(図 1 参照)。児童による活動 B、C、D、E、F の使用言語は英語、交換留学生による活動 G とその他の活動は英語か日本語あるいは母語(任意)である。その他の活動は、主として児童と交換留学生がともにする活動であり、ゲームの説明なども、児童または交換留学生自身が行った。また、事前準備として 2013 年度からは、留学生在が写真付きで児童に向けた自己紹介文(日本語)を寄せ書きスタイルで 1 枚にまとめたものを作成して小学校児童の各クラスに送り、児童がそれを読んで各留学生在に招待状を送っている。

4-2. 2019 年度 7 月の交流授業の目的

【児童にとっての目的】

- ①学習した内容に加え、班で協力して調べ学習や話し合いを行い、英語で「日本文化と小平市のおすすめの施設を紹介しよう!」の発表を完成させ、交換留学生在に発表できる。

- ② 交換留学生に発表するという状況から英語を使う必要性を理解し、現実世界との繋がりを体験する。
- ③ 交換留学生の「出身地紹介」をよく聴き、様々な言葉や文化に関心を持つとともに、世界の色々な地域の人々の生活や文化を身近に感じ、多様性を理解する。
- ④ 進んで交換留学生と交流し、コミュニケーションの楽しさや大切さを実感できる。
- ⑤ 様々な国の交換留学生が日本語を勉強していることを知る。

【交換留学生にとっての目的】

- ① 児童との交流を通して、日本の小学校文化について知る。
(すでに述べたが、交換留学生の場合、卒業後にALT、地方自治体の国際交流員、あるいは民間の英語教師として再来日する人がいるので、その意味でも将来の参考になる。)
- ② 自国のことについて紹介できる。(これもすでに述べたが、使用言語は日本語、英語、あるいはその両方。どちらをどう使うかは交換留学生自身に任せる。)
日本語で児童とやりとりをすることができれば、日本語の練習になる。また、日本語ではなくて英語(母語)でやりとりをする場合でも、情報発信者としての役割を担うことができる。

4-3. 2019年度7月の交流授業の概要

2019年7月9日の交流授業に参加した児童は、6年生2クラス70人。交換留学生12人であった。出身国・地域は、韓国6人、台湾2人、オーストラリア1人、フィリピン1人、ドイツ1人、フランス1人であった。そのほか、日本人のボランティア学生も7人参加した。

小学校の6年生各教室で10時35分から12時25分まで途中休憩をはさんで約1時間50分、さらに交流給食(約30分)も加えると約2時間20分の交流授業となった(図1参照)。交流授業は小学校の担任の主導で運営され、筆者らは児童と交換留学生の班活動が問題なく行われているか、班をまわって様子を見たり、ときおり、児童と交換留学生とのやりとりに参加したり、記録のため観察メモを取ったり、写真を撮ったり、授業の進行を担当と確認したりした。日本人ボランティア学生は日本語力の比較的弱い留学生に付いて、児童の班に加わり、活動に参加した。以降に図1の(1)～(6)を説明する。

- (1) 交換留学生 12 人が 6 人ずつに分かれ各教室を訪問し、交流授業が開始された。まず交換留学生が一人ひとり英語と英語が母語でない場合は母語、そして日本語で自己紹介をした。内容は児童が既習した英語を中心に、同じ内容で母語、日本語でも行われた。あらかじめ準備してある自己紹介であったため、交換留学生にはさほど緊張した様子は見られず、皆にこやかに自己紹介を行っているように見られた。児童たちは、理解できる英語を聞いて目を輝かせ、異なる外国語を聴いてその違いに驚き、日本語の自己紹介では自分が理解したと思う内容を確認していた。
- (2) 児童は交換留学生の人数に合わせ 5, 6 人で 1 班を構成し、交換留学生が一人ずつ各班に入る形で児童の発表と (3) の交換留学生の発表が行われた。児童たちの英語の発表は「留学生に日本と地域の良さを紹介しよう」というプロジェクト学習⁵のゴールとなるもので、いわば 1 学期間の英語学習の総まとめである。1 学期に学習した内容や自分たちで調べた地域のお勧め情報の中から、最も発表したい内容を話し合って決め、発表方法を工夫し、休み時間などに練習を積んできた。交換留学生は、児童の発表を聴いて日本語や英語で児童らに感想を述べたり、質問をしたりしていた。

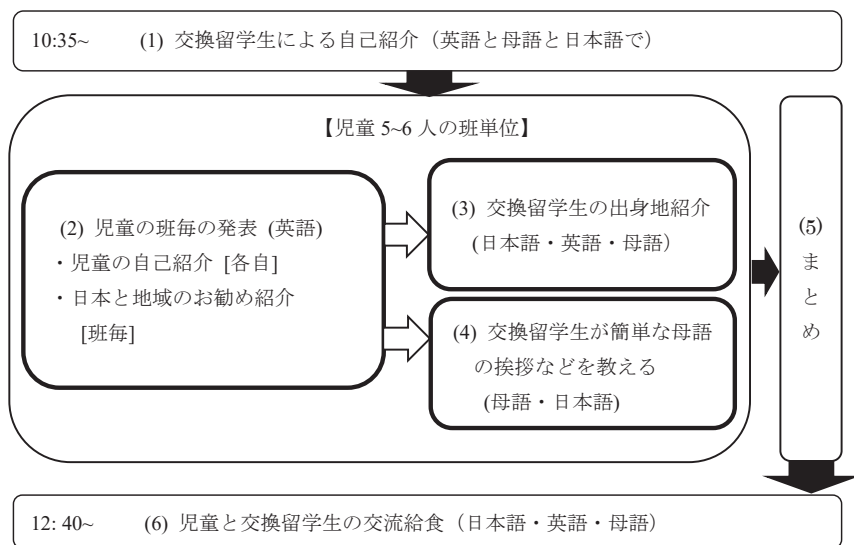


図 1 交流授業の流れ

- (3) 交換留学生の発表は、自分の出身地についての紹介である。交換留学生には交流授業の2週間前に、当日の活動予定について知らせ、準備しておくように伝えた。そして7分ほどshow and tellの方法で行うこと、つまり、話の内容を示す写真や物などを持参して児童に説明することを確認しておいた。当日は、各自パソコンやスマートフォンなどを使って写真を見せたり、自分で作成したパワーポイントなどのスライドを見せたり、大きくプリントアウトした写真を見せたりなどそれぞれ工夫していた。児童らは身を乗り出して交換留学生の示す写真などを見ながら、熱心に説明を聞き、質問をしていた。

この(2)と(3)の活動を児童たちは、異なる交換留学生と3回行った。児童たちが班毎に別の交換留学生の所に行き、互いにあいさつから始め、まず児童が英語で自己紹介をした後(2)の発表を行い、次に(3)の交換留学生が発表をするという流れである。最初は緊張した様子の児童も、2回目には声やジェスチャーも大きくなり、3回目には自信を持って発表している様子が多く見られた。

- (4) 児童たちは自分たちの発表の後、4人目の交換留学生からは、(3)の活動の代わりに簡単な挨拶などの母語を教えてもらった。(2)と(4)の活動もセットで3回行ったので、児童たちは様々な言語を教えてもらった。交換留学生は、母語と日本語でゆっくり発音したり、紙に書いたり、意味を説明したりしながら、児童に丁寧に教えていた。児童は、異なる言語の響きや文字の形の一つ一つにとっても興味深そうに耳を傾け、慣れない音を楽しむかのように、交換留学生が教えてくれる母語の発音に繰り返し挑戦していた。
- (5) 上記の活動の後、12時15分には交流授業のまとめとして、何人かの児童が感想を発表し各クラスで共有した。
- (6) 給食は、大学の授業等で早く帰らなければならない交換留学生もいたが、ほとんどの交換留学生が参加した。授業と異なり、リラックスして日本語や英語、母語で会話をしている様子があちこちで見られた。

5. アンケート分析

交流授業の後に、児童、担任、交換留学生、日本人ボランティア学生に対しアンケート調査を行った。以下にその分析結果を記す。

5-1. 児童

児童の交流授業アンケートは大きく分けて2つ、①自分の発表についてと②交流授業の具体的内容についてである（付録1参照）。以下にその分析結果を示す。まず、①自分の発表について、「発表で準備したことが伝えられましたか」に4件法で尋ねたところ、「とてもそう思う」63%、「まあまあそう思う」33%、「あまりそう思わない」4%、「まったくそう思わない」0%という結果で、ほとんどの児童（96%）が肯定的評価だった。その理由を自由記述で尋ね、KJ法（川喜田，1967）で分析したところ、「しっかり大きな声でジェスチャーをつけて発表できたから」といった自分の発表の様子、「班で協力して何回も練習して準備した通りにできたから」といった今までの努力の成果、「留学生がうなずいたり、笑ったりしながら聞いてくれたから」といった留学生という他者からの評価を挙げている児童が多かった。その一方、「緊張して声が小さくなってしまったから」「少し間違えてしまったから」という発表の失敗による否定的な評価をした児童もいた。上記の数値的分析と記述的分析双方に基づく、自分の発表によりほとんどの児童が、満足感・達成感を得ていることが分かる。

次に、②交流授業の具体的な内容について、楽しかったものに丸をつけるよう指示したところ、多くの項目で肯定的結果となった（表2参照）。このことから、児童たちは自分の発表だけでなく、交換留学生との様々な交流を楽しんだと考えられる。

表2 2019年7月交流授業項目別児童の評価（70人）

項目	楽しかった
留学生の国の言葉を教えてもらったこと	74 %
留学生と一緒に給食を食べたこと	63 %
留学生に質問したこと	56 %
留学生の自己紹介を聞いたこと	51 %
留学生の出身地紹介を聞いたこと	51 %
留学生に日本文化と小平のお勧めを紹介したこと	40 %
留学生から自分たちの発表の感想を言ってもらったこと	26 %

さらに、交流授業アンケートとは別に、1学期の英語学習で興味を持ったことを尋ねたところ、交流授業に関する内容が非常に多かった。児童にとっ

て、交流授業が英語学習で大きなウエイトを占めていることが分かる。なかでも、英語以外の言語や文化に関する内容が多く見られた。以下に主なものを挙げる。まず、「交流会で英語だけでなく韓国語のあいさつに興味を持った」「外国語の時間に英語だけでなく、韓国語や中国語も習えてよかった」「色々な外国語でありがとうなどのあいさつを知って楽しかった」「留学生の人が教えてくれた言葉にルーツがそれぞれあって面白かった」「英語の時間は英語しかやっていないので、もっと色々なところの言葉を覚えたい」「英語だけでなく様々な言葉を聞いて、そこの国の言葉を覚えたい」といった英語以外の外国語への興味を示す感想が最も多かった。次に、「色々な外国語を覚えて、その国のことをもっと知りたい」「他の国のことをもっと知りたい」「韓国と日本は文化が似ているところがあったが、言葉が違っていった」「留学生が教えてくれた言葉や文化は日本と違うことがたくさんあって面白かった」といった国や文化へと興味の対象が広がっている児童も多かった。また、「英語だけでなく色々な国の言葉を覚えてたくさんの外国人と話したい」と英語以外の外国語をコミュニケーションの道具として捉えている児童もいた。さらに、「留学生の人たちが色々な言葉を使っていてすごいと思った」「留学生がみんなとても英語が上手だった」と交換留学生を外国語学習者モデルとして見ている様子や「英語にもさまざまな種類があることが分かった」と道具として英語を使う交換留学生の姿勢に驚きと憧れや安心を感じていることが分かる。その一方、日本語や日本文化について改めて考える機会となったり、英語の大切さを再確認したりする児童もいた。

5-2. 担任

担任からは、交流授業に関して「非常に貴重な取り組みで今後もずっと続けてほしい」という意見が毎回聞かれる。担任アンケートを分析すると、事前準備については「事前に写真付きメッセージをもらい、子どもたちが招待状を書くことは、伝える相手が明確になり子どもたちのモチベーションが確実に上がり、交流会を目標に発表練習を頑張るので、効果的だと思う」、発表までの取り組みについては「実際に留学生に日本のことを伝えるというゴールが明確なため、児童が活動の見通しを立てて取り組めた」「交流会に向けて練習する中で子どもたちも自信がつき、当日の留学生との関わりをととても楽しんでいた」、当日の様子については「様々な国の人たちと触れ合うことができるため、言語や文化に対して興味を持つ児童が多かった」「留学生からの話もタブレット等で準備してもらえたので、具体性がありとてもわ

かりやすかった」と肯定的な評価だった。

ただ過年度には、「ほぼ日本語ばかり話す留学生がいて残念だった」という感想も聞かれたことがあった。英語学習の一環として行っている活動であるため、どうしても英語を児童に使わせたいとの思いが強く、交流授業の意義を単に英語使用の場とだけ捉えたり、外国語といえば英語といった英語優先の意識から抜け切れていなかったりするのかもしれないと推測する。しかし、これは指導者の一端を担っている白土自身にも責任がある。

5-3. 交換留学生

交換留学生へのアンケート（付録2参照）は、各活動に対する質問と全体的な感想を求めたものである。交換留学生全員から回収した。まず、「子どもたちからの招待状はどうでしたか」に対しては、ほとんどのコメントに「かわいい」「よかった」「うれしい」という表現が見られた。児童らから期待されていることへの喜びが表れていた。次に、「子供たちの発表はどうでしたか」に対して、「とてもよかった」から「よくなかった」までの4件法での平均値は3.5で、この活動を高く評価していた。その理由として、児童らの発表形式に対するものと発表態度に言及したコメントがみられた。発表形式については「おもしろかった」、そして発表態度については「元気」「energetic」「一生懸命」に「頑張って」といるというコメントが得られた。交換留学生自身による出身地紹介の活動についての質問「ホームタウンの紹介やQ & A、子どもたちとのやりとりはどうでしたか」に対しては、児童らの態度についての言及のみで、自身の発表に関するコメントはなかったが、「とても楽しかった」から「全然楽しくなかった」までの4件法での平均値は3.5であった。理由としては、「いろいろ質問」された、「よく聞いてくれた」など、児童らの熱心な態度によるものである。また、「子どもたちに母語を教える活動はどうでしたか」に対しても、同様の4件法で平均が3.5であった。児童らの態度、「頑張って」「覚え」ようとしたり関心をもってくれたりしたことを、高く評価していた。アンケートで尋ねたこれらの活動については、例年通り、それぞれ高い評価が得られた。

しかしながら、全体的な感想の部分で、今年は例年とは違った感想が得られた。例年、交換留学生による英語・母語・日本語による自己紹介を、交流活動の最初に行っている（図1参照）。これについては、交換留学生側と児童との間でやりとりが生じないので、今までアンケートでは項目を設けておらず、したがって、この活動についての交換留学生の意見を求めることをし

てこなかった。しかし、今回、全体的な感想を求める自由記述で、英語が母語でない学生、得意ではない学生にとって「先生が英語をしるというのがちょっと大変だった」というように心理的負担になっていることを述べた交換留学生がいた。また、児童が英語で発表をすることに対し、交流というよりも「英語のボランティア」としての役割を期待されていると感じた交換留学生もいたことも判明した。

「英語のボランティア」という点に関しては、小学校側は英語の授業の取り組みの中の一環としてこの交流授業を位置付けているので、基本的に受け入れなければならない。交流授業を行うにあたって、関が交換留学生にこの交流授業の目的を説明する際に、小学校側の事情と目的を留学生に説明し損ねていたことが災いしたと考えられる。しかしながら、自己紹介を英語で行うことが負担になる学習者もいることを考えると、英語での自己紹介については学習者自身に選択させるというような配慮も必要かもしれない。交流授業を始めた2011年以来、例年、英語が母語あるいは公用語の交換留学生が半数以上で、多い時は8割以上を占めていたが、今回は非英語母語・公用語話者の交換留学生が8割以上であった。そのため、交流授業で英語を使うことに対する違和感を覚えた者がおり、このような問題が浮き彫りになったと考えられる。

もう一つ、全体的な感想で書かれたコメントに、以前はあまり自分の国のことを考えなかったが、交流を通じて自分自身や自分の国のことを考えるようになったというものがあった。交流は児童だけにとどまらず、交換留学生自身にも自国の文化について考えるきっかけになることが明らかになった。

最後に、「小学校に行って、あなたがはじめて知ったことがありましたか」に対しては、給食のことに触れたものが多かった。学校での給食文化がない国もあること、給食で提供される食事の内容、給食の作法、今回記述した者はいなかったが、給食時の児童による放送など、様々な気づきがあったようである。

5-4. 日本人ボランティア

日本人ボランティアに対しては子どもたちの発表と交換留学生の発表、また交換留学生が児童に母語を教える活動それぞれについて、4件法でよかったかどうかを問い、その理由も記述してもらった（付録3参照）。また、それ以外に気づいた点や感想についても自由に記述してもらった。アンケートに回答した者は7名中3名だけであったが、交換留学生や児童らに交じって

活動に参加していたボランティア学生からは貴重な観察結果や意見が得られた。

まず、児童の発表についてはとてもよかったという評価であった。理由は児童の「エネルギー」で「元気いっぱい」な積極的な態度を高く評価しているためである。留学生の発表についても、写真を見せるなどの準備の良さ、また笑顔でコミュニケーションを取っている態度が高評価の理由になっていた。母語を教える活動については、留学生自身も自分の母語を「子供たちが学んでくれている喜びを感じているようで、とても楽しそう」であったという観察や、児童らにとって「英語以外の言語に触れる良い機会に」なり、「子供たちの視野が広がったのではないか」という意見が述べられた。また児童について「ある韓国人留学生から教わった韓国語を違う韓国人留学生に使用して、言語が伝わる面白さを体験している姿を目の当たりにしたときは感動した」という記述や「純粋に言語を楽しむという経験を子供達ができていてとても良い」という意見も述べられていた。

日本人ボランティア学生のみから見ても、交流授業での活動が総じて児童と交換留学生双方にとって良い経験になっていると感じられたようである。

6. 考察と課題

6-1. 児童

まず児童の目的に照らして、児童アンケートから得られた分析結果に加え、筆者らの観察、担任や日本人ボランティア学生、さらに交換留学生のコメントをもとに考察する。

- ①「学習した内容に加え、班で協力して調べ学習や話し合いを行い、英語で『日本文化と小平市のおすすめの施設を紹介しよう!』の発表を完成させ、交換留学生に発表できる。」

交流授業のアンケート結果から、95 %以上の児童が発表で準備したことが伝えられたと答えている。筆者らの観察や担任、日本人ボランティア学生、さらに交換留学生のコメントからも児童が練習や発表を頑張った様子が分かる。さらに、児童が発表で準備したことが伝えられたと判断した理由では、自分の発表時の様子、それまでの努力の成果、そして留学生という他者からの評価を挙げている(5-1 参照)。これらの理由から、プロジェクト学習の特徴である児童の満足感や達成感が読み取れる。また、白土が実施した同時期

の別の調査⁶では、プロジェクト学習の他の特徴である英語学習への関心・意欲、さらに自信に肯定的影響が見られた（白土, 2019）。よって、交換留学生への英語の発表の成果に、満足感・達成感、そして英語学習への関心・意欲や自信を高めた児童が多かったと考えられる。

- ②「交換留学生に発表するという状況から英語を使う必要性を理解し、現実世界との繋がりを体験する。」

担任のアンケート（5-2 参照）から、相手意識を持って発表練習を頑張っていたことが分かる。英語を使う必然性のある程度感じて取り組んだと推測できる。また、交流授業で実際に交換留学生に発表した体験は、現実世界とのつながりを感じる機会となったはずである。ただ実際には、児童と交換留学生は、授業や給食の時間に日本語でも交換留学生の母語でもコミュニケーションを楽しんでいる様子が見られた。よって、英語の授業の中での取り組みであるとはいえ、児童はそのような枠にとらわれずに自由に交流していたと考えられる。

- ③「交換留学生の『出身地紹介』をよく聴き、様々な言葉や文化に関心を持つとともに、世界の色々な地域の人々の生活や文化を身近に感じ、多様性を理解する。」

児童の「1学期の英語学習で興味を持ったこと」に関する自由記述から、多くの児童が英語以外の外国語への興味、世界の国や文化への興味、さらに外国語学習やコミュニケーションの道具として英語以外の言語にも興味を示している。これらのことから、交流授業をきっかけに様々な言葉や文化に関心を持ち始めていることが分かる。

- ④「進んで交換留学生と交流し、コミュニケーションの楽しさや大切さを実感できる。」

児童の交流授業のアンケート分析の表2から、最も多くの児童（74 %）が「留学生の国の言葉を教えてもらったこと」が楽しかったと答えている。これは、「1学期の英語学習で興味を持ったこと」の自由記述分析と一致する。さらに、6割以上の児童が「留学生と一緒に給食を食べたこと」が楽しかったと答えている。これは、すでに述べたように（4-3（6）参照）、白土の児童観察メモもこの点を裏付けている。児童にとって給食を食べるという楽しい時間を留学生と共有でき、しかも日本語でも大丈夫との声掛けで会話しやす

い雰囲気であったことから、英語に苦手意識のある児童も嬉しそうに話しかけていた。ただし、コミュニケーションの大切さまで感じたかは、残念ながら今回だけの取り組みでは確認できない。

⑤「様々な国の交換留学生在が日本語を勉強していることを知る。」

交流授業のアンケートには、交換留学生の日本語が上手であることへの驚きが書かれていた。また、実際交換留学生の自己紹介を聞いて日本語が上手だと驚いている児童が多かったことから、交換留学生が日本語学習を頑張っていることを実感できたと考える。だからこそ、「留学生の人たちが色々な言葉を使っていてすごいと思った」というコメントにつながったのだろう。

以上児童にとっての目的に照らして考察すると、ほぼこれらの目的は達成できている。その一方、指導者側に英語に対するこだわりの姿勢がみられる。白土自身もそのことに気づかされた。本交流授業は英語学習の一環ではあるが、英語を使う必然性ばかりに目を向ける必要がないことを、児童のアンケートが教えてくれた。自由記述の質的分析では、児童が交流授業で英語の大切さや伝わる喜び、プロジェクトが成功したことへの満足感や達成感だけでなく、外国語、さらに外国の生活・文化へと興味の広がりを示していた。また量的分析でも、5割以上の児童が直接「留学生の自己紹介を聞いたこと」や「留学生の出身地紹介を聞いたこと」を楽しかったこととして挙げている（表2参照）。このことから、参加児童たちは交換留学生の母語や生活・文化に興味を持っていると考えられる。白岩（2012）も述べているように、英語だけでなく、様々な言語の歴史と人々の生活に思いをはせることが多文化共生につながるはずである。英語を使う必然性は、英語母語話者と児童との間では自然であっても、非英語母語話者間でしかも日本語という共通語がある場合には、必然ではないだろう。児童のみならず指導者も、この点を踏まえ、多様な交換留学生との交流という機会を多文化の観点から捉えるべきである。例えば、児童たちは英語による発表を交換留学生に聞いてもらいコメントをもらうだけでなく、交換留学生の国についても調べ、疑問点を留学生に直接質問をしたりして理解を深めることができれば、相手の国の文化や生活により一層興味を持つ機会となり、相互交流による学びもさらに深まるのではないだろうか。事前の調べ学習が交流時に効果をもたらしたエピソードが米本（2016）に記述されている。また、指導者側も新学習指導要領（文部科学省，2017）の目標に照らして、交流授業の意義について改めて話し合うことも大

切になるだろう。

6-2. 交換留学生

次に、交換留学生側の目的の達成に関して考察する。

①「児童との交流を通して、日本の小学校文化について知る。」

小学校文化を知る機会を得ることは、通常の留学生活ではできないことだけに、貴重な経験であることに言及した者も今回2名いた。(自国とは)「少々違った日本の小学生の文化を体験することができて、とても楽しかった」というコメントに代表されるように、交流授業に参加したことで、この目的はある意味達成されているだろう。もちろん、個人により気づきの程度は異なるが、校舎に一步入って靴を脱いでスリッパに履き替えた時点で、下足禁止であることを知ることから始まり、学校内で見聞きしたことすべてが、交換留学生にとって初めての経験である。

②「自国のことについて紹介できる。」

使用言語は日本語か易しい英語、あるいは両方で行うこと、どちらにするかは交換留学生に任せることをあらかじめ留学生に伝えており、それぞれ自由に言語を使いながら、紹介を行っていた。アンケートでは、自身の発表について触れた者はいなかったが、筆者らが各班の活動を観察したかぎりにおいては、準備した内容について日本語で児童らに伝えること、また児童らの質問に対しても、場合によっては日本人ボランティア学生の力を借りながら、答えることができていた。Show and Tellの方法で行ったので、言語による情報だけでなく、視覚情報も駆使して児童らに分かりやすく紹介できたと考えられる。交換留学生によっては、児童に質問を投げかけて、児童の興味をうまく引き出しながら発表していた者もいた。アンケート結果からは、児童らの積極的な参加態度が交換留学生には好ましく映り、情報提供者としての役割を楽しく担うことができたことがうかがえる。アンケートには記述されていなかったが、交流授業後にある交換留学生が、「タピオカティーがもともと台湾から日本に入ったものなのを知ってもらえただけでも、(今回の活動を)やったかいがあった」と笑いながら話していたことに象徴されるように、自国についての正しい情報を知ってもらうことができることは、交換留学生にとっての喜びでもある。

また、出身地について紹介するための準備や児童からの質問をきっかけに、改めて自分自身や出身地について考えることにもつながり、交換留学生自身

が自国についての知識や考えを深める学びの機会になっている。

6-3. 課題

以上のように、児童側と留学生側で設定した目的については、ほぼ達成することができたと言ってよいだろう。しかし、留学生に対するアンケートで記述されたように、児童による英語での発表に交流授業としての違和感を持った者がいる点、また、英語・母語・日本語での最初の自己紹介で、英語が心理的負担になっている者がいる点については、筆者側の運営上、反省すべきであることが分かった。まず、前者と後者に共通する、英語を使うという点については、今回、児童側は英語教育の枠組みの中での活動であるため、英語での発表は避けられないことを、事前に丁寧に交換留学生に説明すべきであったことが、反省の第1点として挙げられる。一方、交換留学生側は出身地紹介において日本語を使って発表すれば日本語の練習になり、児童らは英語を聞くことができなくとも、見知らぬ海外の情報をその地に住む人から直接聞くという貴重な経験を得ることができる。もし交換留学生が日本語を使わずに英語で発表した場合は、日本語の練習にはならないが、情報発信者としての役割は担うことができる。こうして双方がそれぞれにとって利するような活動をすることがこの交流授業の大きな目的であることを、事前に十分に理解させておけば、交換留学生も納得して活動に臨み、「英語のボランティア」として期待されているというような違和感を覚える結果にはならなかっただろうと考えられる。こうした理解が、この交流授業を成功させる大前提にあったことを、あらためて思い知った。また、そのような観点から考えて、交換留学生全体に課していた英語での自己紹介は、留学生自身に選択させるほうがよいだろう。

この反省をもとに、今後は、児童側と交換留学生側両方の目的と意義について、交流授業の双方の運営者、つまり小学校教師と筆者らが共通理解を持つことが必要である。そして、児童、交換留学生もそのことを事前に十分理解して、交流授業に臨めるようにしていきたい。そのために、今一度、交流授業の意義を次章において確認する。

7. 交流授業の意義

新学習指導要領が示す英語学習の必要性和様々な国や言語・文化、さらに多様な考え方への理解の必要性は相反するものではなく、共存するものであ

ると考える。英語学習も児童たちにとっては異なる言語や言語学習に伴う文化や考え方に触れ、それを理解しようとする取り組みの1つに他ならない。この共存のためには、外国語が教科化される中、外国語＝英語という固定観念に捕われないバランス感覚を養う必要があるだろう。それを身につけるのが小学校の外国語であるとするなら、その実践としての交流授業にこそ、金城（2010）が指摘しているように、児童たちに外国人には「みな英語を話さなければならない」（p. 43）といった考えが間違いであることに気づかせる役割がある。そのためには、児童に英語が重要なコミュニケーションの道具であるという認識を新たにさせるとともに、様々な外国語への興味を抱かせるよう、指導者側が配慮することが重要である。その点において、交流授業は児童が英語で発表をする場となるだけにとどまらず、交換留学生の show and tell によって異文化に触れる場になり、過去において行った多言語ゲームや今回初めて取り入れた、交換留学生から彼らの母語を教わる活動によって、様々な外国語に触れる場になっている。

そのような場をつくるためには、交換留学生という豊かな情報を持ち合わせた人材の存在が欠かせない。交換留学生なくしてこの活動が成り立たないという意味で、交換留学生の貢献が大きいことは言うまでもないが、同時に、交換留学生にとっても意味のある活動でなければならない。交流授業の大きな目的は、双方にとって利する活動であることだ。そして、個々の活動について、児童にとっても交換留学生にとっても貴重な経験になったことは上述のとおりである。

児童が英語だけでなく交換留学生の母国と母語にも興味を抱いて活動をとっても楽しんだこと、また、交換留学生が児童のそうした態度を好ましく思って活動を楽しんだことは、アンケート結果から明らかである。一部の交換留学生が感じた英語優先の違和感は、児童らとのやりとりの中で生じたものではなく、英語が母語の学生以外にも、自己紹介で英語の使用を求めた配慮不足や児童の発表が英語での発表であることについての説明不足による誤解など、主に運営上の問題である。交流授業の意義を児童、交換留学生双方が感じられるよう、今後に向けて改善する必要があるだろう。

8. 新たな取り組みに向けて

そのための具体的な方策として以下の①から③を示す。

①小学校教師と筆者らとの間で、英語に拘泥せず、多文化理解・交流を行う

という共通認識が進むよう、事前打ち合わせを行う。

- ②①の共通理解を前提に交換留学生には、交流授業の準備段階で、児童側の目的についても丁寧なガイダンスを行う。そして、児童側の目的の一つである英語での発表は、英語学習の一環であり、交換留学生に発表を聴いてもらってコメントをもらうことを児童が期待していることを、理解してもらう。そのうえで、自己紹介について、母語と日本語での自己紹介は必須とし、その他得意な言語があればそれも使って自己紹介するが、英語で行うかどうかについては交換留学生の判断に任せ、強制はしない。その他の活動の中での児童とのやりとりも、どの言語を交換留学生が使用するかはコミュニケーションの自然な流れに任せ、今まで通り、交換留学生にとくに英語の使用を望むようなことはしない。

- ③児童たちは、事前に交換留学生の国について調べ、当日の留学生が行う出身地紹介の理解を深め、疑問点は留学生に直接質問できるように準備しておく。

次回からの交流授業がよりよい活動になるよう、今後も常に振り返りをしながら取り組んでいきたい。

謝辞

本交流授業は、実践校である小平市立小平第十五小学校の多大なるご理解とご協力を得て実践しております。ここに感謝の意を表します。

注

1. 学習指導要領（文部科学省，2008，2017）では、外国語として「英語を履修させることを原則とする」と明記されていることから、実践校では外国語として英語を学習している。
2. 本稿では注1同様の理由から、外国語活動を英語活動、外国語学習を英語学習とする。
3. 一般財団法人自治体国際化協会 CLAIR が行っている、語学指導等を行う外国青年招致事業（The Japan Exchange and Teaching Programme）の略。
4. 日本語教員養成課程を履修している学生（日本語教授法演習の履修者を中心）にボランティアとして交流授業に参加してもらっている。交換留学生一人に対し、ボランティア学生一人がサポートとしてつけるように、交換留学生の人数に合わせて、交流授業のつど募集を行っている。
5. 本稿のプロジェクト学習は、Project-Based Approach に基づくプロジェクト重視の英語学習を意味し、白土が2011年から実践校で取り入れている指導法である。その特徴として、英語の実践的スキルの向上とともにゴール達成による満足感・達成感や英語学習への関心・意欲、自信の高まりが期待できる（Fried-Booth, 2002）。

6. 本稿と同じ参加児童（2019年度6年生1学期）に事前事後4件法でアンケート調査をしたところ、英語への関心・意欲（ $F(1, 138) = 10.01, p < 0.01$ ）、自信（ $F(1, 138) = 7.77, p < 0.01$ ）ともに単純主効果分析で有意な差が見られた（白土, 2019）。

引用文献

- 阿部始子（2017）「国際理解教育と小学校英語教育を結ぶカリキュラム構築を目指した探究的实践—質的研究手法を活かして—」『日本児童英語教育学会。研究紀要』No. 36, pp. 69-87.
- 星圭子（2009）「大学留学生にとっての小学校との交流活動の意義」『文化女子大学紀要 人文・社会科学研究』17, pp.129-144.
- 井上桃子・山本長紀（2014）「児童が求める国際交流—日本・オーストラリア間の交流授業の实践報告—」『小学校英語教育学会誌』14巻01号, pp. 50-65.
- 金城尚美（2010）「小学生と留学生の交流活動による異文化理解教育の教育効果に関する一考察」『留学生教育：琉球大学留学生センター紀要』7, pp. 33-47.
- 川喜田二郎（1967）『発想法』中央公論新社
- 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説外国語活動編』東洋館出版
- 文部科学省（2017）「小学校学習指導要領」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newscs/icsFiles/afieldfile/2017/04/27/1384661_4_1.pdf
- 関麻由美・白土厚子（2014）「小学6年生と大学の交換留学生との交流授業—互惠性のある活動を目指して—」『言語教育実践 イマ×ココ 現場の实践を記す・实践を伝える・实践から学ぶ』No.2, pp. 60-71.
- 白土厚子（2019）「*We Can!*を活用した移行期2年目の6年生の实践—移行期1年目の同じプロジェクト重視の英語学習と比較する—」『関東甲信越英語教育学会第43回神奈川研究大会発表要領』p.78.
- 白岩麻奈（2012）「交流活動の意義を考える—留学生と小学生との交流活動の報告—」『文化外国語専門学校紀要』25, pp. 9-33.
- 津田塾大学戦略推進本部事務局（編）（2019）『Tsuda Today』No.110, 津田塾大学
- 米本和弘（2016）「留学生と小学生の交流活動—表層的な文化紹介を乗り越えることを目指した試み—」『言語教育実践 イマ×ココ 現場の实践を記す・实践を伝える・实践から学ぶ』No.4, ココ出版
- Fried-Booth, D. L. (2002). *Project work* (2nd ed.). Oxford: Oxford University Press.

付録 1

児童交流授業アンケート（質問項目抜粋）

①留学生に「日本文化と小平のおすすめの施設紹介」を発表した時、自分が準備してこんなふう
に伝えようと思っていたことができたと思いますか。

- (a)とてもそう思う (b)まあまあそう思う (c)あまりそう思わない (d)まったくそう思わない

質問①で、どうしてそう思ったのですか。（具体的にそう思った理由を何でも書いてください。）

②留学生との交流授業は、楽しかったですか。

- (a)とてもそう思う (b)まあまあそう思う (c)あまりそう思わない (d)まったくそう思わない

③授業や給食の時間で何が楽しかったですか。（楽しかったものの全部に○でつけましょう。）

- (a) 留学生の「自己紹介」を聞いたこと
(b) 留学生に「日本文化と小平のおすすめの施設紹介！」を英語で発表したこと
(c) 留学生に質問したこと
(d) 留学生から「自分たちの発表」の感想を言ってもらったこと
(e) 留学生の「出身地紹介」を聞いたこと
(f) 留学生の国の言葉を教えてもらったこと
(g) 一緒に給食を食べたこと
(h) その他 _____

質問③の答えで、具体的にどんなところが楽しかったですか。

④授業や給食の時間に留学生と交流をして、どんなことを発見したり、気づいたりしましたか。

付録 2

留学生交流授業アンケート（質問項目）

しょうがっこうほうもん つぎ しつもん こた
小学校訪問について、次の質問に答えてください。

Please answer the following questions about the activities at the elementary school.

1. 子どもたちからの招待状はどうでしたか。

How do you feel about the invitation card from kids?

2. 子どもたちの発表はどうでしたか。How was the children's presentation?

おんせい じ こ しょうかい
5年生の自己紹介

☐ とてもよかった ☐ よかった ☐ あまりよくなかった ☐ よくなかった

おんせい ほっぴょう
6年生のグループ発表

☐ とてもよかった ☐ よかった ☐ あまりよくなかった ☐ よくなかった

3. どうしてですか。Why?

4. ホームタウンの紹介やQ & A、子どもたちとのやりとりはどうでしたか。

How was the interaction with children including Q & A about your presentation?

☐ とても楽しかった ☐ 楽しかった ☐ あまり楽しくなかった ☐ 全然楽しくなかった

5. どうしてですか？

6. 子どもたちに母語を教える活動はどうでしたか。

How was the activity of teaching your mother language to children?

☐ とても楽しかった ☐ 楽しかった ☐ あまり楽しくなかった ☐ 全然楽しくなかった

7. どうしてですか？

8. 次のアクティビティの中で何が楽しかったですか。楽しかったものにチェックしてください。

Which of the following activities did you enjoy? (Please check all that apply.)

☐ 自己紹介 ☐ 子どもたちの発表 ☐ あなたの発表 ☐ 子どもとのQ & A

☐ 七夕の短冊づくり writing a wish on a strip of paper for tanabata

☐ 折り紙

☐ いっしょに給食を食べたこと eating school lunch with children

☐ その他 other activities if any

9. 小学校に行って、あなたがはじめて知ったことがありますか。

What was the first time you have experienced in Kodaira 15th elementary school?

10. 感想 Comments

日本人ボランティア学生交流授業アンケート

小学校訪問について、次の質問に答えてください。

1. 子どもたちの発表はどうでしたか。チェックしてください。

5年生の自己紹介

☐ とてもよかった ☐ よかった ☐ あまりよくなかった ☐ よくなかった

6年生のグループ発表

☐ とてもよかった ☐ よかった ☐ あまりよくなかった ☐ よくなかった

2. それはどうしてですか。

3. 留学生の発表はどうでしたか。チェックしてください。

☐ とてもよかった ☐ よかった ☐ あまりよくなかった ☐ よくなかった

4. それはどうしてですか。

5. 留学生が児童に母語を教える活動はどうでしたか。チェックしてください。

☐ とてもよかった ☐ よかった ☐ あまりよくなかった ☐ よくなかった

6. それはどうしてですか。

7. 5年生との七夕飾りづくり、についてはどうでしたか。

8. その他お気づきの点や、感想をご自由にお書きください。

9. アンケートのご回答を分析したものを、実践報告論文に載せてもかまわないかどうかについても、お答えください。分析結果で、個人が特定されるような出し方はいたしません。例えば、「よかった」と回答した人が〇人、のような書き方をします。また、自由記述の部分については、お名前は出しません。「許可しません」にチェックした方については、集計等からも外します。

☐ 許可します

☐ 許可しません